



Data

監督: クリスチャン・リヴァーズ
 原作: フィリップ・リーヴ『移動都市』(創元SF文庫刊)
 出演: ヘラ・ヒルマー/ロバート・シーアン/ヒューゴ・ウィーヴィング/ジヘ/ローナン・ラフテリ/レイラ・ジョージ/パトリック・マラハイド/スティーヴン・ラング/カレン・ピストリアス

👁️👁️ みどころ

司馬遼太郎亡き今、壮大な世界観をもった長編小説はイギリスの独壇場!? ピーター・ジャクソンの大作『ロード・オブ・ザ・リング』と『ホビット』に続いて、フィリップ・リーヴの大作『移動都市』が映画化!

まずは「移動都市」「60分戦争」「反移動都市同盟」「楯の壁」等の概念を学習し、3718年という時代設定をしっかりと想定しよう。

私は「満蒙領有論」から「満蒙独立論」を理想とし「世界最終戦論」を書いた、昭和の軍人・石原莞爾の壮大な構想を重ね合わせながら本作を鑑賞したが、さてあなたは?

都市は地を這う車輪の上に! 巨大移動都市・ロンドンが都市と人を喰い尽くす地上の支配者! 現在のメイ首相率いるイギリスの落日ぶりは顕著だが、小説なら何でもアリ。しかし、移動都市・ロンドンの横暴が過ぎると・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この世界観に注目! 英国人作家の構想力に感嘆! ■□■

小説も映画も、大切なのは人間の想像力・空想力だが、短編ならいざ知らず、多くの人物が登場する壮大な物語を全体的に構成するには、構想力が必要だ。近時、アメリカで大流行の「アメコミもの」は『スーパーマン』以来、多くのヒーローを生み出し、多くの世界観を作り出してきた。それは日本のマンガも同じで、『鉄腕アトム』や『鉄人28号』はその先駆者だ。また、先日はじめて観た「アメコミもの」の『アクアマン』(18年)では、その新たな世界観にビックリさせられた。その衝撃は、『宇宙戦艦ヤマト』をはじめ観た(読んだ)時の衝撃と同じようなものだ。

しかして、近時は『ロード・オブ・ザ・リング』3部作（01年、02年、03年）、『ホビット』3部作（12年、13年、14年）という、壮大な構想に基づき、壮大な構成力をもって書かれたイギリス人作家・ピーター・ジャクソンによる原作の映画化が相次いでいたが、そこに新たに本作が登場！それは、イギリス人作家フィリップ・リーヴのファンタジー小説『移動都市』だ。本作はその4部作のうちの第1部の映画化だが、そもそも「移動都市」って一体ナニ？少年向けのファンタジー冒険小説が今でも大好きな私には、そしてまた都市問題をライフワークにしてきた弁護士の私には、そんな原作とそれを映画化した本作には興味津々で、こりゃ必見！

■□■時代は3718年。都市は地を這う車輪の上に！■□■

日本の昭和の軍人・石原莞爾が東条英機と犬猿の仲だったことはよく知られている。しかし、それ以上に大切なことは、1931年（昭和6年）の満州事変の張本人となった彼は、「王道楽土」、「五族協和」をスローガンにした「満蒙領有論」という壮大なビジョンを持っていたことだ。それは、次第に「満蒙領有論」から「満蒙独立論」に変質し、さらに「世界最終戦論」へと発展していくが、さて、「世界最終戦論」とは一体ナニ？それに対して、英国人作家フィリップ・リーヴは、2020年の東京五輪から約100年後の2118年頃には『60分戦争』が勃発し、“メドゥーサ”と呼ばれる量子エネルギー兵器を用いた戦争で地殻が粉々に砕け散り、文明社会は終わりを告げる、とイメージしたそうだが、これも一種の「世界最終戦論」？それはともかく、彼の原作では、生き残った者たちはノマド（放浪民）となり、エンジンと車輪で移動するようになったらしい。これが、1600年後の「移動都市時代」の幕開けだ。

そこで世界を支配した思想が「都市淘汰主義」。これは、かろうじて生き残った人々が移動する都市を建造し、食糧を奪う「捕食都市」を認める考え方で、移動都市・ロンドンはその最大のものらしい。したがって、都市は地を這う車輪の上に！しかして、小説では「小さな都市は小さな都市を捕食し、小さな町はもっと小さな町を捕食する」姿が非常に自然な進化として描かれているそうだが、誰が考えても、このコンセプトには限界がある。つまり、「大都市が小都市を喰い尽くしてしまい、やがて捕食する小都市が消滅する。そうになると、大都市同士で争うか、狩りの対象を他に見つけなければならなくなる」ということだ。もっとも、本作導入部では、そんな“哲学的な論点”は語られず、そんな時代状況の中で、巨大移動都市・ロンドンが市長マグナス・クローム（パトリック・マラハイド）統治のもと、小さな移動都市を探し出して資源を吸収し、住民たちはその狩りに歓声をあげる様子が映し出されていく。

なるほど、なるほど。そういう世界観なら、本作から約1600年前に都市問題をライフワークにしてきた私にも十分理解できる。もっとも、フィリップ・リーヴの原作では巨大移動都市の名前はロンドンだが、もし日本人作家がそんな原作を書けば、当然その名前

は東京だったはず・・・。

■□■まずはロンドンによる“都市捕獲”を圧倒的な映像で！■□■

漫画（コミック）は絵がメインで言葉はサブだから、主として絵からその世界観を想像するもの。また、新聞の連載小説には毎回挿絵があるから、文字だけでなく挿絵からその世界観を想像することができる。しかし、小説（単行本）には挿絵はないから、文字を読むだけでその世界を空想しなければならない。したがって、小説を読むには漫画より集中力と想像力が必要だ。私は『アクアマン』も『移動都市』も読んでいない。また、コミック本の『アクアマン』なら1時間もあれば読めるだろうが、『移動都市』はそうはいかないし、数時間かけて全部読んだとしても移動都市ロンドンをどのように想像するかは難しい。しかし、その点、映画なら・・・。

本作冒頭は、そんな要望（？）に応じて、ある小型都市を追い、これを捕獲しようとする大移動都市ロンドンの姿を圧倒的な映像で実況中継してくれる。ちなみに、パンフレットによると、移動都市・ロンドンの大きさは、「幅：約1,500m 奥行き：約2,500m 高さ：約860m 時速：約160km」だ。また、パンフレットの説明によるとその詳細は次のとおりだ。

圧倒的な力で地上を支配しようと進撃を続ける巨大移動都市。7つの層で構成され、最下層のガット（腸）では、捕食した都市から資源や、労働力となる奴隷を取り込み、消化作業所で不要物の処理と廃棄を行っている。1つ層が上がる毎に住民の生活はより豊かになり、最上層には上流階級の市民が暮らす。セント・ポール大聖堂といった歴史的な建造物や、ロンドンの歴史を知る上での貴重な資料が展示されている博物館、希少である書籍を膨大にそろえた図書館などが存在し、市民はそこで優雅な暮らしを送りながら、他の都市が捕食される様を嬉々として見物している。21世紀展示室には、コンピューター、仮想現実（VR）眼鏡、ゲーム機、イヤホン、腕時計、凍りつき石化した膨大な量の携帯電話等がショーケースの中に陳列され、古代技術（オールドテック）を知るための貴重な遺物として扱われている。

本作冒頭は、まずそんな圧倒的な映像に注目！ちなみに、宮崎駿監督の『ハウルの動く城』（04年）でも似たような「お城」を見た記憶があるが、その規模は圧倒的にロンドンの方が上。

■□■ヒロインの魅力は？郷ひろみ似（？）のトムは？■□■

本作の世界観と移動都市ロンドンという構想力にはビックリだが、その物語に登場する人物は意外に想定範囲内。本作の導入部では、ロンドンによる都市捕獲の裏で、小型都市から大都市ロンドンに入り込んだ謎の女ヘスター・ショウ（ヘラ・ヒルマー）が、ロン

ドンの指導者であるサディアス・ヴァレンタイン（ヒューゴ・ウィーヴィング）の暗殺に及ぶシークエンスが登場する。これが長い原作の骨格をなす対立のストーリーで、どうやらヴァレンタインは、同じ考古学者であったヘスターの母親パンドラ・ショウ（カレン・ピストリアス）が発見した旧時代人の遺物・古代技術（オールドテク）を盗んだ上、パンドラを殺した男らしい。

他方、ヘスターはヴァレンタイン暗殺の千載一遇のチャンスを、ヴァレンタインの下で働いていた歴史家見習いの若者トム（ロバート・シーアン）の介入によって阻止されてしまったが、一連の流れの中で見る郷ひろみ似（？）のトムは、かなり能天気な若者らしい。そのため、せっかく助けてやったヴァレンタインからダストシュートの外に突き落とされてしまった理由もわからないまま、トムは以降ロンドンを離れ、ヘスターと共に外界をさまようことになってしまう。しかし、そんな苦労を二人で重ねていくうちに、いつしか二人にはロミオとジュリエットのような深い恋の感覚が生まれていくことに……。

本作のチラシには、ロンドンをバックに覆面をしたヘスターの姿が映されているが、これがなかなか神秘的。ヘスターが覆面をつけているのは、母親のパンドラがヴァレンタインに殺された時にヘスターも左頬に刀傷を負ったためだが、覆面をとってみれば、こりやなかなかの美女。そのため、本作では謎めいた覆面姿を見せるのは導入部だけで、それ以降はトムとのロマンスが芽生えていく中で、頬のキズも心なしか小さくなり、少しずつ美人度が増していくので、それに注目！もともと、それはストーリー形成において、良いこと？それとも……？

■□■復活者シュライクの造型は？物語は？その賛否は？■□■

ロンドンの市長はマグナス・クロームだが、市長以上の実権を握り、ロンドンを“最凶の都市”にするため、“ある計画”を企てている男がヴァレンタイン。しかも、ヴァレンタインはヘスターの母親の仇だから、見た目以上のワルらしい。しかし、その娘のキャサリン・ヴァレンタイン（レイラ・ジョージ）は美人だし、性格は素直そうだから、この父娘関係はかなり違和感がある。また、本作ではあまり大きな役割をもたず、多分本シリーズ第2作以降で大きな役割を果たすだろうと予想される若者が、下層階級のエンジニアの若者ベヴィス・ポッド（ローナン・ラフテリー）。トムを含めてここらまではみんなともそんな人間だが、本作中盤では一転して“ストーカー”（復活者）と呼ばれている人造人間シュライク（スティーヴン・ラング）が登場するので、まずはその造型とその出自（？）に注目！

シュライクについて、次に注目すべきはシュライクとヘスターとの関係だが、これは少しややこしい。つまり、母親を殺され孤児になってさまよっていたヘスターを助け育てたのがシュライクだということはすぐにわかる。しかし、そもそもストーカーとは、人間を狩り、殺すことを目的に、倒れた兵士の身体と機械から作られ、本来、記憶や感情、痛み

を持たないとされる人造人間で、心臓がないため死ぬことができないという代物らしい。それなのに、なぜシュライクが地球上に存在する最後のストーカーとなり、この世に蘇った“復活者”になるのか？かつてヘスターを救い一人前の女に育て上げたシュライクとヘスターが、今はなぜ敵対しているのか？そこらあたりが少しややこしいので、本作中盤は少しダレてくる感が……。それにしても、シュライクの造型とシュライクとヘスターについての物語は、私にはイマイチ……。

■反移動都市同盟とは？空賊アナのキャラは？賛否は？■

移動都市があれば、反移動都市がある。それがヘーゲル哲学の法則（？）であり、人間社会の必然（？）だから、原作者フィリップ・リーヴは、“信念を貫き、希望を求める反逆者”としての“反移動都市同盟”の姿をしっかりと描いているらしい。パンフレットによれば、反移動都市同盟とは、60分戦争の後、ノマドとしての生活を選ばなかった者たちで、ロンドンに抗う反勢力同盟だ。彼らは荒廃した地上を巨大都市が支配し、弱い都市を捕食する事は間違っているという信念の下、飛行船で大空を飛び回りながら戦い続けているらしい。また、反移動都市同盟の重要拠点であり、地に根付いた生活と平和を望む最大級の静止都市が「シャングオ」。それを囲む巨大な防壁が「楯の壁」だ。これは約1800mの高さを誇り、壁の先にある新たな狩り場を求めるロンドンの進撃を、数世紀にわたって防いでいるらしい。なるほど、なるほど。トランプ大統領がメキシコとの国境に築こうとしている壁は結構巨大なもので、現代版“万里の長城”ともいうべきものだが、本作にみる楯の壁の高さは1800mだから、はるかにこの方が巨大。いまから1600年後はこれによってロンドンの進撃を防いでいるとなると、やはり今メキシコにトランプ流の壁を築く必要があるのかも……？

それはともかく、そんな“ハード面”への興味とは別に、面白い人物が、反移動都市同盟の中心人物で、空賊の女性アナ・ファンだ。彼女は自力で飛行船「ジェニー・ハニヴァー」号を作って飛び回っているが、ロンドンからその首に最高レベルの賞金を懸けられているらしい。このアナを演じるジヘは、ミュージシャンとしても活躍している韓国女優で、今まで見たことがないような異色のキャラクターだ。アナはヘスターの母パンドラのこと、ヴァレンタインの野望、すなわち、「60分戦争」で世界を破滅させた古代技術（オールドテク）の究極兵器・メデューサを現代によみがえらせ、1800mの高さを誇る「楯の壁」に潜む反移動都市同盟に攻撃を仕掛けようとしていることもよく知っていた。さらに、それを阻止するキーウーマンがヘスターだということもよくわかっていたため、外界を逃げ回るヘスターを救出し、反移動都市同盟への協力を求めようとしたわけだが、さあ、そんな空賊アナの賛否は？

■「第1部」のハイライトをどう見る？戦闘の迫力は？■

『宇宙戦艦ヤマト』は日本人にかつての「戦艦大和」の夢を蘇らせてくれると共に、新たな宇宙観を提示してくれた。それと同じように、1977年から始まり、今なお続いているジョージ・ルーカスの『スターウォーズ』シリーズ（旧三部作、新三部作、続三部作）は、全世界の人々に「遠い昔、はるか彼方の銀河系で・・・」から始まる、銀河共和国を核とした壮大な物語を見せてくれるとともに、銀河系での“宇宙戦争”のあり方を具体的な映像で示してくれた。しかし、それは同時に、宇宙ステーションの造型やたくさんの戦闘機が火花を散らして戦う風景が、人類が第2次世界大戦やその後のたくさんの（部分）戦争で体験したものと基本的に変わらないことも教えてくれた。

しかして、今から約1600年後の3718年にヴァレンタインが新たに開発したメドューサ砲をひっさげて楯の壁の破壊と反移動都市同盟の殲滅のために挑んだ戦いとは？映像でそれを見せるのは至難の業だが、本作は果敢にそれに挑戦しているので、それに注目！ちなみに、私はチャールトン・ヘストンとソフィア・ローレンが共演し、11世紀後半のレコンキスタで活躍したカスティール王国の貴族エル・シドを描いた『エル・シド』（61年）や、12世紀の十字軍の物語を描いた『キングダム・オブ・ヘブン』（05年）が大好きで何度もDVDで観ている（『シネマ7』34頁）。『キングダム・オブ・ヘブン』では、クライマックスの聖地エルサレムの攻防戦の迫りに息を呑んだが、城壁で囲まれた都市を攻略するのはとにかく大変。しかし、メドューサ砲の並外れた破壊力があれば・・・。ヴァレンタインはクローム市長を殺害し、今やその本性を丸出しにしながらメドューサ砲を発射させたが、さあ、亡き母親が残した形見の品の意味、効用をやっと発見したヘスターは、それを使ってヴァレンタインの野望を阻止することができるのだろうか？

なお、『ロード・オブ・ザ・リング』の第1部では、第2部以下の製作を当然のこととして、字幕終了後にその“予告”が流されていたが、本作の字幕終了後は・・・？

2019（平成31）年3月7日記